

機械化転換期における 稲作技術の多様化とリスク

秋田県大潟村を事例に

How to Evaluate Failures? : The Process of Developing Technologies
in the Modernization of Rice Farming

渡部 鮎美

WATANABE Ayumi

はじめに

- ① 本論の視点と調査方法
- ② 大規模稲作モデル農村の誕生と失敗
- ③ 失敗と成功のなかで
- ④ 大潟村における技術選択とその要因
- ⑤ 多様化した技術とその背景

【論文要旨】

本論文は日本の稲作技術が機械化されていった1960年代後半から1970年代前半にかけての転換期において、人々がいかに技術を選択していったのかを論じるものである。一般に、転換期は在地の多様な稲作技術が機械化され、全国一律の技術に画一化していった時期であると考えられている。ところが、転換期には各地の農家が様々な新技術を開発してもいた。こうした稲作技術の多様化はどのようにしておこったのであろうか。

本論文では農家が新たな技術を生み出した過程を詳細に検討することで、転換期における稲作技術の多様化がどのようにして生じてきたのかを明らかにした。具体的には聞き取り調査や統計資料などの調査をおこない、転換期における農家の技術選択の過程を明らかにし、新たな技術がどのように選ばれ、用いられてきたのかを示した。調査地は国家事業として1960年代に大規模な稲作単一経営のモデル農村として建設され、全国から入植希望者が集められた秋田県大潟村とした。

転換期の大潟村の農家は、稲作単一経営であったために稲作収入で家計が支えられていた。そのために大潟村の農家は新しい技術を用いて失敗をすれば、大きな損害を被ることにもなった。しかし、稲作単一経営という厳しい経営にあっても、大潟村の農家は米の生産性を上げるために新たな技術に挑んでいった。

先行研究では、人々は在来の技術を利用してリスクの分散や回避を最優先にした生業戦略をとることを考えてきた。さらに、人々が新たな技術を取り入れる際には他の生業や作物をリスクの担保にして利益の最大化を目指すとしてきた。しかし、大潟村の農家は稲作単一経営というリスクの担保になるものが何もない状態で、利益の最大化のために、あえてリスクをおかして新しい技術に挑んできた。つまり、技術の多様化はリスクの回避や分散ためではなく、リスクを背負ってでも、より多くの収益を得ようとする方向で進められていったのである。そして、技術の多様化の背景にはリスクを背負ってでも新しい技術に挑んでいくという農家の労働観があったのである。

【キーワード】 稲作農家、稲作技術、労働観、リスク、近代化